

# 2017年度「FDを推進するための活動補助事業」の実績報告

人文学部 森 直久

## [目的]

アクティブラーニングの一種である『学び合い』(二重かっこの学び合い)の大学教育への適用を推進する。教養科目(臨床心理学科必修)「心理学(1)」、同じく教養科目「心理学概説」、専門科目「心理学基礎ゼミナール」「裁判心理学」に『学び合い』を導入する。「課題の難易度の適正化」、「相互交流の促進」、「フリーライダーの扱い」、「アクティブラーニングへの抵抗の扱い」などの未解決問題に特に注意しながら、授業設計、授業運営を行なった。自らの実践を重ねながら、全国にいる『学び合い』実践者との情報交換や、『学び合い』の中心地である新潟(上越教育大学)での研修に参加し、大学教育での『学び合い』の適切な運用を実現しようとする。

## [方法]

一週間前に授業中に解決すべき課題や補助資料を学生に送信する。課題は教科書の内容をまとめるもの、教科書の内容を日常に適用して考えるもの、学説の説明や批評である。

教員は基本的に直接教えず、受講生同士の教えあいを促し、またホワイトボードやツイッター、web掲示板などを利用した情報の共有と交換を推奨することを原則とした。

相互交流を促すため、昨年と同様、受講生にネームプレートを付けてもらうことにした(「心理学(1)」のみ)。

「心理学(1)」については、昨年度の履修者有志10名が補助員(SA)として参加することを表明してくれたので、協力を要請した(無給)。

「授業時間内に課題の全員達成」「個々人による最適な学習環境の整備」が毎時間強調された。また、前回授業の取り組みの振り返りを、毎回の授業の冒頭で行ない、学生の活動の改善を毎回心がけた。

「心理学概説」については、受講生各自に毎回、授業の振り返り(進歩した点、改善した方がよい点)をリアクションペーパーの形で実施した。教員はこれにコメントをつけて、翌週の授業で返却する。

## [成果]

『学び合い』を実行する上で注意すべき反省点がいくつか明確化した。第一に、教員が常に授業に関与している姿勢の可視化が重要、特に『学び合い』開始早期において重要であること。あまりに早く受講生にすべてをまかせるような授業運営をすることで、教師の授業への関与が受講生に疑われる。**2/3程度までは、教師が常に全体を見渡していることを、受講生に印象付けることが肝要であった。**第二に、制約の与え方の加減の調整が必要であること。最適な学習環境の整備を強調しすぎると、学生が自習でよいと思い込み、授業への出席率が低下する。出席していない学生の単位取得率は低かった。自らに最適な学

習環境や学習方法の発見、学習習慣や意欲の維持のために、出席は義務化したほうがよいと思われた。第三に、出席しながらも活動性の鈍い受講生の活性化の方法を工夫すべき。高出席率にもかかわらず、単位取得に至らなかった受講生が少なからずいた。リーダー的学生の講義を聴くという、一方向的教授に近い環境が少なからず現出していた。残念ながら昨年度に引き続き、受身的な学習の不利益がもたらされてしまったようである。学習スキルのレポーターを獲得する機会を作り、受動的聴講以外のスキルを駆使できるようにするとよいと思われた。第四に、フィードバックの与え方に工夫が必要であること。教員は、ホワイトボードに書かれた受講生の解答を見て回っていたが、解答へのコメントが「ダメ出し」と受けとられ、修学意欲を奪ってしまう可能性があった。コミュニケーションの取り方が重要であり、コーチング的な関わりがベターであると思われた。第五に、受講生の凝集性を高めることが肝要であった。西川教授によると、少人数の島集団ができるのは普通で、この間を飛び回る少数のリーダーがいればよいとのことである。しかしホームルールのない大学では、この状況のままだと学習集団として発達しないと感じられた。島集団をまたいだ受講生の出会いを促進し、より大きな集団の凝集性の確保が必要である。最後に、大学の授業としての要求水準を維持しながら、課題の難易度をどのように調整すればよいかについては解決に至らなかった。受講生の2割以上が、授業時間の半分で課題を達成できると、相互交渉が盛んになると言われていた。しかしあらためて、大学の授業の要求水準と、受講生の基礎学力のギャップをどう埋めたらよいのかは、最後まで疑問として残った。

期末テストの結果を前年度と比較したところ、昨年度より単位取得率は低下した。「穴埋め問題」を撤廃し、説明を求める記述式にしたことによる影響も考えられた。高得点者の割合は昨年度と同様で、入学時の成績優秀者より、AO入学者(高校まででドロップアウトした者とか)、地方の指定校入学者の活躍が目立った。知識の獲得以外の学習が得意な学生の可能性が開拓されているのかもしれない。

また「基礎ゼミナール」で特に見られたように、受講生間の結びつきは促進されたと思われる。またリーダー的資質を開花させたり、不得手なことに挑戦する意欲を持った学生の出現、高校までで不遇だった学生の再生も散見された。

#### [課題 (展望)]

学級づくり(受講生の凝集性と教員関与の可視化を高める)、出席の徹底、擬似的一斉授業が発生を抑止する学習スキル獲得の機会提供、コーチング的関わりを導入、そして課題難易度の調整を今後の課題としたい。授業評価アンケートでは、抵抗を示す学生もいる一方、昨年度よりスコアは向上し、次第に理解者は増えてきているようである。高大接続改革が間近に迫り、「旧世代」最後の学生に恩恵を与えられるように、大学での『学び合い』の最適化をこれからも継続したい。単年度(学期)ではわずかな成果であっても、これが累積し上位2割(西川教授によると集団に変革が起こる臨界点)の学生が生まれる時が2年次か3年次にやってくればよいと思う。